新中日
(第3種郵便物認可)

海、山の男ら満足げ

針之岩遠征隊

市民ら盛大に歓迎

生きて帰った…家族実感

針之岩往復二千二百キロの船旅を終えた「白雲」など三ヨット三艇は、三日正午過ぎ、帰港した碧南市の新川港ヨットハーバーで、市民ら約千人の大歓迎を受けた。念願を果たした海と山の男たちが陸に上がった。日焼けした顔。花束を渡す家族たちの目が光った。前人未踏、日本最大級高さ百三十六メートルの岩峰登頂を陰で支えた留守部隊、初めて間近にヨットを見た市民ら。盛大な帰港式に続いてのパーティー。快挙を祝う港には様々な顔があった。

帰港式で万歳をする遠征隊員ら＝碧南市の新川港ヨットハーバーで

家族たち

「生きて帰れたからよかった」。登はん隊員・鮎沢清次さんの妻安子さん(三三)は午前九時、この言葉を残して、子供三人と出迎えのため、新川港から残りの家族らと一緒に、タグボートに乗り込んだ。春日井の自宅を出たのは午前五時半だった。

鮎沢さんとは登山が縁で結婚。「もし登頂に失敗したら、多くの人に迷惑をかけます。神様に頼むよりしかなかった」

長野県岡谷市の実家に墓参りに行った。名古屋の熱田さんにも。鮎沢さんの母親は、長野県の御岳山まで二回、ご祈とうに走った。

ヨットの安藤康治隊員(二九)の家からは、安城市赤松町に住む父親の正義さん(五〇)ら五人が来た。

「台風で心配だったが、天候がよくて何よりだった」。どの家族も待ちに待った帰港の日だった。

針之岩

小笠原諸島の聟(むこ)島列島にある無人島。北緯二七度四〇分、東経一四二度一〇分。名古屋から南東千百キロ、小笠原諸島の父島の北八十キロに位置し、日本海溝から直接岩が突き出ている。波が荒く上陸が難しいうえ、砂利をまいたような岩の表面で、これまで岩登りを拒んできた。

浮かぶ苦労の日々

留守部隊

花火が鳴った。約四十艇のヨットと一緒に「フライング」ら三艇が新川港に接岸。午後零時半過ぎ。約七百人の市民や家族らが岸壁に立った。真っ黒に日焼けした隊員たち。

帰港式は午後一時十分から始まった。ステージに隊員らが勢ぞろいし、共催者のあいさつなどが続き、万歳に続いて最後は鏡割り。

結局、留守部隊の責任者、碧南ヨット協会副会長の関修さん(五〇)＝刈谷市新富町＝は最後まで、表に出なかった。

「無事に終わったのが一番よかった。きょうは天気がよくてありがたかった」。ほーっと肩で大きく息をついた。いつものように言葉は少なかった。

針之岩遠征実現のため、走り回った日々。五人の登はん隊員が頂上に立つために、どれだけの人が動き、支えてきたか。関さんも、はっきりした数はわからない。

そろいのマーク入りのTシャツを着てパーティーで焼きそばを食べる市民ら

夢とロマンを与えた冒険のない時代

帰港式に次いで、留守部隊が総力をあげて、その場でパーティーを開いた。針之岩のシンボルマークをつけたTシャツ姿が並ぶ。焼きソバ、焼き肉、冷麦各五百人分、かき氷、だんごなどが用意され、ほとんどがあっという間になくなった。

少し静まったテントのそばに碧南市体育協会理事長の深津一志さん(六三)がいた。「今の若者は〝現実的〟なことをいってすますが、年寄りじみた発言をする人が多い。それでもよいのか。若者に今こそ、夢とロマンが必要なのでは」。

時代の波で沈みかかっている「冒険」の二文字。針之岩遠征隊はそのひとつ、きっといえる。